

一人一人が安心感をもつことができる学級づくりを目指して
- 構成的グループエンカウンターによる人間関係づくりを通して -

教育相談課 長期研修員 栗田 法子

1 主題設定の理由と研究目的

子供たちは学校生活の中で、友達や教師と様々なかかわりを持ち、人間関係をつくっていく。しかし、最近は家庭や地域での人とかかわる体験が少ないことなどにより、人間関係をうまくつけれない、過度に不安や緊張が高くなってしまふ、ストレスを適切に処理できないなど子供の人間関係における問題が生じている。子供の人間関係づくりを図るには、学級内の子供同士の関係や教師との関係、学級集団などが大きくかかわってくる。互いに認め合い、どの子も自己存在感をもつことができるような安心感のある学級集団をつくるのが子供同士の人間関係を深め、一人一人の社会性を身に付けることにもつながると考える。

そこで、学級集団への支援の重要性に着目し、研究主題を「一人一人が安心感をもつことができる学級づくりを目指して - 構成的グループエンカウンターによる人間関係づくりを通して - 」とした。なお、研究対象として友達とのかかわりが大きく変化する3年生と5年生を取り上げ、それぞれの学年の心の発達段階（資料1）の違いを考慮しながら学級の状態などに応じた支援の在り方について研究を進めていく。

【資料1】子供の心の発達段階
(友達とのかかわりを中心に)

1年	・流動的な友達関係。 ・場面場面で一緒にいるのが友達。
2年	・一緒にいるきっかけによって友達ができる。 ・相手との類似性から親密な関係をつくらうとする。
3年	・強い結束力をもつ遊び仲間（ギャングエイジ）。 ・仲間とのやり取りの中で人とかかわり方を学ぶ。 ・自己中心的な考え方から他者の立場に立った考え方ができるようになる。
4年	・「友人」という存在を意識し始める。 ・一人一人の差異が分かる。 ・自信、自己評価が下がり始める。
5年	・遊び仲間から気の合う友人へ固定する。 ・性差の意識。 ・同性の集団。男女の反目。 ・自己を否定的に見る子供が現れる。 ・自分を見つめ、内省する。
6年	・思春期に入りかけて不安を感じる。 ・自分を支えてくれる人、存在価値を認めてくれる人をほしがる。

2 研究仮説

教師が学級の人間関係の継続的な実態把握に努め、心の発達段階を考慮しながら構成的グループエンカウンター（注1）（以下SGEという）を取り入れた学級活動の授業等を通して学級の人間関係づくりを行えば、一人一人が自己存在感をもつことができるような安心感のある学級集団となり、子供の人間関係をより深め、社会性を身に付ける（注2）ことにもつながる。

3 研究の方法

(1) 「目指す学級の姿」と具体的な子供の表れの確認

(2) 学級の人間関係についての事前調査

ア 「たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U」(図書文化)(注3)(以下Q-U)

イ 学級担任や教科担任教諭、養護教諭から見た学級の様子

注) 落合幸子、落合良行、高木和子編著『小学生の心理』全6巻、大日本図書、2000年を参考に筆者がまとめた。

(3) 学級の間人関係についての継続調査

ア 子供の自己評価

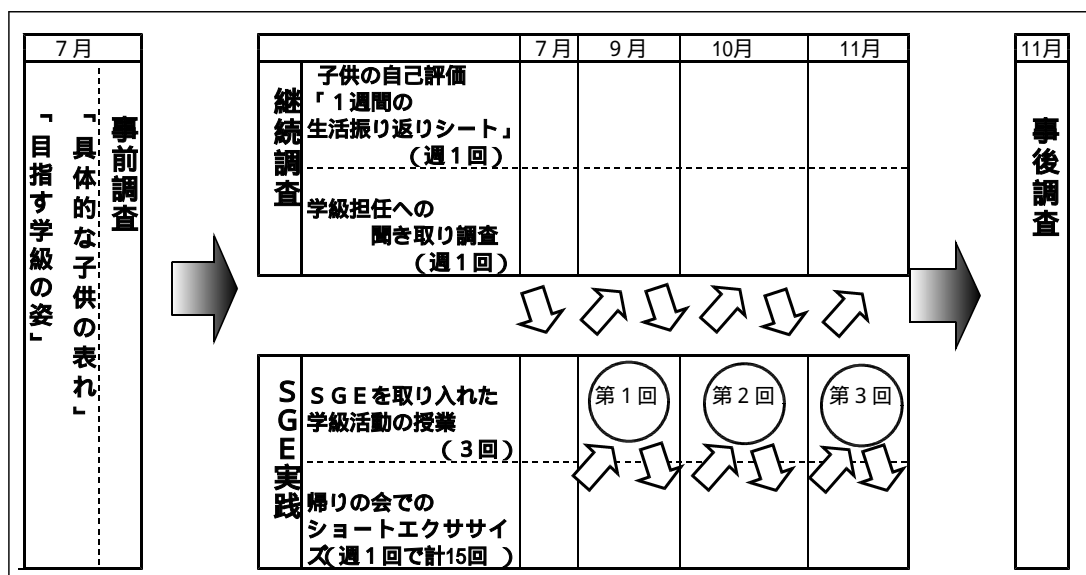
イ 学級担任への聞き取り調査

(4) 授業及び帰りの会におけるSGEの実践

(5) 事後調査による実践の評価・考察

以上の方法を資料2に示すとおり計画的に実施する。研究対象は、在籍校R小学校の3年A組（男子13人、女子18人、計31人。担任は、教職30年目の女性教諭）と5年A組（男子14人、女子15人、計29人。担任は、教職3年目の男性教諭）であるが、本報告書においては、このうちの3年の実践を中心として報告する。

【資料2】研究の流れ



4 研究の内容

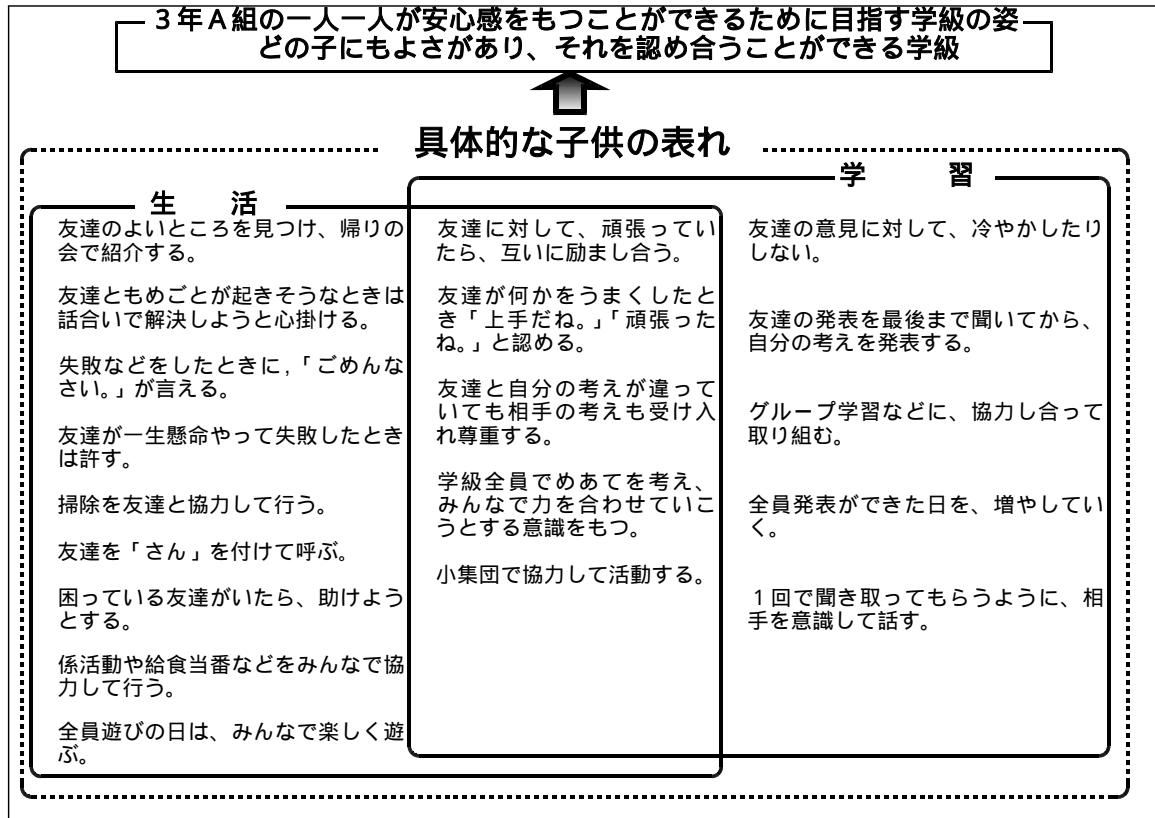
(1) 「目指す学級の姿」と具体的な子供の表れの確認

研究を行うに当たって、まず年度当初の学級経営案をもとに、学級担任との間で一人一人が安心感をもつことができるために目指す学級の姿について話し合った。相手の気持ちを理解したり、相手の考え方と自分の考え方の違いを認めながらかわり合ったりする人間関係づくりが一人一人が安心感をもつことにつながると考え、目指す学級の姿を、「どの子にもよさがあり、それを認め合うことができる学級」とした。そして、その目標となる具体的な子供の表れを19項目設定した（資料3）。これらの項目は、いずれも3年の心の発達段階（資料1）を踏まえると、この時期の子供たちの社会性の獲得として重要なものである。

続いてこれらの項目一つ一つを現在の子供たちの様子と照らし合わせる中で、学級担任との間で3年A組の子供たちに特に身に付け育てたいと考えられる項目が、

（資料3の網掛け部分）であることを確認した。

【資料3】3年A組の目指す学級の姿と具体的な子供の表れ



(2) 学級の人間関係についての実態調査

ア 事前調査(7月)の結果とまとめ

S G E のエクササイズには六つのねらい(自己理解・他者理解・自己受容・信頼体験・感受性の促進・自己主張)がある。「目指す学級の姿」及び子供の表れに向けた支援として、子供たちにどのようなねらいのエクササイズを行えば人間関係づくりにより効果的であるかをつかむため、事前調査を行った。

(ア) Q - U

Q - Uを使って学級に対する意識(学校生活意欲尺度・学級満足度尺度)を調査した。学校生活意欲尺度では、「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」の3観点での学級平均得点がすべて全国平均より上回っていた(資料4)。

【資料4】学校生活意欲尺度3年A組と全国平均との比較

	友達関係	学習意欲	学級の雰囲気
3年A組平均	10.2点	10.8点	10.3点
全国平均	8.4点	8.7点	8.7点

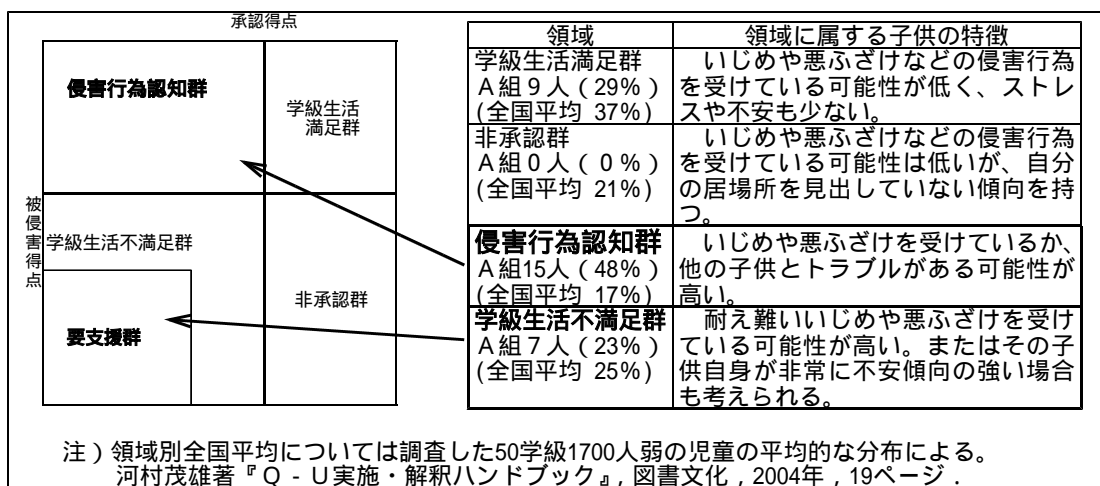
注)全国平均とは約6000人の児童を対象に実施した調査から出た値である。
 出典)河村茂雄著『Q - U実施・解釈ハンドブック』, 図書文化, 2004年, 15ページ。

また、学級満足度尺度では、資料5に示すように侵害行為認知群に属する子供が学級全体の48%に当たり、全国平均の17%を大きく上回っている。

学級生活不満足群に属する子供は学級全体の23%で全国平均の25%とほぼ同じである。しかし、要支援群(承認得点が低く、被侵害得点が高い)の子供が3人いた。

一方、非承認群に属する子供は一人もいなかった。

【資料5】学級満足度尺度 3年A組分布図



(イ) 学級担任や教科担任教諭、養護教諭から見た学級の様子

学級担任や教科担任教諭(一人)、養護教諭にそれぞれ学級の様子について聞き取り調査を行った。資料6はこの3人の意見を整理要約したものである。

【資料6】教師がとらえている学級の様子

学級の様子	教師
<ul style="list-style-type: none"> 好奇心が強い子供が多く、活動に意欲的に取り組む。 元気のよい子供が多い。 自分の思いや意見をはっきり言う子供が多い。 友達の考えと自分の考えが違う場合、自分の考えを認めてもらいたいという思いが強い子供が多い。 自分の思いを表現することができる反面、友達の思いをくみ取ることが苦手な子供がいる。 学級のまとまりを意識する子供はまだ少ない。 相手の話の途中で発言する子供がいる。 	学・教 教・養 学・教・養 学・教・養
	学
	学 学

注)学...学級担任, 教...教科担任教諭, 養...養護教諭

(ウ) まとめ

二つの調査結果は、3年の心の発達段階の特徴である「同年齢の子供との結び付き・結束力が強い時期であり、それだけ子供同士のぶつかり合いも多い」とほぼ同様の表れを示すものであった。特に、侵害行為認知群に属する子供が多く、非承認群に属する子供がいないというQ-Uの結果からは、学級に自分の居場所があり、活動意欲が高く子供同士のかかわりもあるのだが、自己主張が強いためにトラブルを起こしてしまう子供が多いと考えられる。今後は成長とともに友達とのかかわりを深めることで、次第に自己中心的な考え方から離れ、相手の視点も考慮できるようになることを期待したい。そのためには、教師ができるだけ多くの子供同士がかかわる場を設定し、相手の気持ちを理解する態度を育てることに重点を置いた支援をすることが大切であり、それが子供一人一人が安心感をもつことができる学級になることにつながるものと思われる。

イ 1週間ごとの継続的な実態調査(子供たちの自己評価・学級担任への聞き取り調査)

資料2に示したとおり、四つの質問からなる子供たちの自己評価「1週間の生活振り返りシート」(資料7)と学級担任への聞き取り調査を研究期間中毎週行い、学級の実態とともに子供一人一人の継続的な把握に努めた。

【資料7】「1週間の生活振り返りシート」内容と実際のシート(質問4)

<p>質問1 発表をしたときクラスの人たちは冷やかさないでしっかり聞いてくれましたか。(承認)</p> <p>質問2 あなたが失敗したり間違ったりしてつらい思いをしたときクラスの人が励ましてくれたり協力してくれたりしましたか。(承認)</p> <p>質問3 あなたはクラスの人に嫌なことを言われたり暴力を振るわれたり無視されたりしましたか。そのときどのくらいつらい思いをしましたか。(被侵害)</p> <p>質問4 ではこの1週間をまとめるとクラスでの居心地はどのくらいですか。</p>	<p>しつもん 4</p> <p>では、この1週間をまとめると、クラスでのいごちはどのくらいですか。</p> <p>あなたの気持ちに一番近い数字に をつけましょう。</p> <table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td><td style="width: 20px;"> </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">0</td><td style="text-align: center;">1</td><td style="text-align: center;">2</td><td style="text-align: center;">3</td><td style="text-align: center;">4</td><td style="text-align: center;">5</td><td style="text-align: center;">6</td><td style="text-align: center;">7</td><td style="text-align: center;">8</td><td style="text-align: center;">9</td><td style="text-align: center;">10</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"><small>ぜんぜん いごちがよくない</small></td><td></td><td></td><td style="text-align: center;"><small>少し いごちがよくない</small></td><td></td><td style="text-align: center;"><small>少し いごちがよい</small></td><td></td><td></td><td></td><td style="text-align: center;"><small>とても いごちがよい</small></td><td></td> </tr> </table> <p>注) 質問4は学級の居心地の評価とする。</p>											0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	<small>ぜんぜん いごちがよくない</small>			<small>少し いごちがよくない</small>		<small>少し いごちがよい</small>				<small>とても いごちがよい</small>	
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10																							
<small>ぜんぜん いごちがよくない</small>			<small>少し いごちがよくない</small>		<small>少し いごちがよい</small>				<small>とても いごちがよい</small>																								

注) 「1週間の生活振り返りシート」は、河村茂雄著『たのしい学校生活を送るためのアンケート Q-U』, 図書文化を参考に筆者が作成した。

【資料8】A子の「1週間の生活振り返りシート」

さらに、このシートの中に記された評価や記述内容から、人間関係について支援が必要であると考えられる子供がいる場合は、学級担任に連絡し、その対応を話し合うこととした。一例として、第3回のシートではA子が質問3に対し、「B男に嫌なことを言われた。」として自分の気持ちを5(つらかった)と評価した(資料8)。学級担任がA子とB男が互いのかかわり方について話し合う機会をつくったことにより、その後A子の心の安定を図る支援につながった。

(3) 1週間ごとの継続的な実態調査を生かしたSGEの実践

事前調査の結果から、他者理解をねらいとするエクササイズを中心にSGEを実施することとした(資料9)。SGEは資料2に示すとおり、学級活動の授業(3回)とそれを補うものとして帰りの会でのショートエクササイズ(週1回、計15回)の二つを並行して行い、その実践を効果的に行うために特に以下の点に配慮した。

- ・ 自己主張が強すぎてトラブルになりやすいという実態から、エクササイズの内容にソーシャルスキル(注4)に関連した活動(あいさつ・話の聞き方・話し方・自己主張の仕方など)を取り入れた。
- ・ エクササイズのグループ構成は、普段かかわりの多い子供同士から、次第にかかわりの少ない子供同士へと段階を踏み、できるだけ多くの子供とグループを組んで相手と自分との考えの違いや相手のよさについて触れることができるようにした。
- ・ 1週間ごとの継続的な実態調査(子供たちの自己評価・学級担任への聞き取り調査)を重視し、事前に計画したエクササイズのねらいなどが実態とずれていると思われる場合は、より適切と考えられるエクササイズに随時変更し、実施した(資料9

)

【資料9】1週間ごとの学級の居心地評価と3年A組SGE実施表

月	子供の自己評価 (学級の居心地の 学級平均)	SGEを取り入れた 学級活動の授業	SGEショートエクササイズ (帰りの会)
7		第1回(9/8)「嫌な言葉とうれしい言葉」(他者理解) ねらい：嫌に思う言葉とうれしくなる言葉を言い合う体験で、互いの気持ちを味わい語り合って受容的な態度を養う。	若返りじゃんけん(信頼体験) 肩もみトーク(信頼体験)
9		第2回(9/29)「ここにこぶんぶん」(自己主張) ねらい：もめごとを起こした相手に仕返しをする前に、確かめの質問をすることの大切さを知り、対人関係のもめごとを自分で解決しようとする意欲をもつ。	二人組質問じゃんけん(他者理解) 肩もみトーク(信頼体験) デシデシじゃんけん(他者理解) 好きなもの、好きな事(他者理解)
10		第3回(11/9)「無人島SOS」(他者理解・自己理解) ねらい：自分の考えを伝え合う表現力を養うとともに、友達の多様な考え方に気付き、お互いを認め合える人間関係をつくる。	タイムトラベル(信頼体験) わたしはあなたのベストフレンド すごくトーク(他者理解) あれ?離れない(信頼体験) わたしのためにあなたのために 給食メニュービンゴ(自己理解) 合わせアドジャン(自己理解・他者理解)
11			若返りじゃんけん 言葉のプレゼント(自己理解・他者理解) 聖徳太子ゲーム 四面鏡(自己理解・他者理解) 二人さいころトーク(他者理解) ねえ、どっちがいい(自己理解・他者理解)
活動が日直と一部の子供に限定されることや、それまで二人組でのエクササイズが多くグループ構成に変化がなかったことから4～5人で行う「すごくトーク」に変更し、同じ生活班の子供同士の間で他者理解をねらった。 文化祭が近付き学級全体での協力を高めていく時期であるため、学級全体で行う「給食ビンゴゲーム」に変更し、ルールを守りながら全員で楽しく行うゲームによる信頼体験をねらった。 2週間前から「1週間の生活振り返りシート」での子供の自己評価や教師への聞き取り調査を通して、隣の席の子供同士でもめ事が起きていることが分かった。そこで、隣の席同士で二人組になり互いのよいところとその理由を伝え合う「言葉のプレゼント」に変更し、自己理解・他者理解により信頼関係を深めることをねらった。 学級全員で協力し大成功に終わった文化祭を振り返って、文化祭までの互いのがんばりを認め合う「四面鏡 - 文化祭編 - 」に変更し、自己理解・他者理解をねらった。			

注1) 学級の居心地の学級平均は、「1週間の振り返りシート」質問4の評価を平均したものである。

注2) []のエクササイズは、実践例として後に述べる。

注3) エクササイズは國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』1996年、『エンカウンターで学級が変わる Part 3 小学校編』、『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集』1999年、『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 Part 2』2001年、図書文化を参考に計画した。

ア SGEを取り入れた学級活動の授業(第1回「嫌な言葉とうれしい言葉」9月上旬)

本学級では自分の感情に任せた自己主張から無意識に相手が傷つく言葉を使って人間関係を上手につくれない子供たちがやや多い傾向がある。第1回から第3回までの「1週間の生活振り返りシート」からも嫌なことを言われたりすることでつらい思いをした経験がある子供が約半数見られた。

そこでSGEの授業で「嫌な言葉」「うれしい言葉」を言い合う体験を通して互いの気持ちを味わい、そのときの気持ちを振り返ることでより適切な話し方を身に付けることと受容的な集団をつくることの両方をねらった。活動の主な流れは資料10のと

おりである。

友達から言われた「嫌な言葉」「うれしい言葉」の事前アンケート結果が提示されると、子供たちは興味深くその結果に見入った。それらの言葉を隣同士で言い合い、お互いにそのときの気持ちを相手に話す活動によって、実際に学級で自分たちが使っている言葉について振り返ることができたようである。子供及び学級担任の感想(資料11)からも、ねらいとした活動ができたものと思われる。

【資料10】授業でのエクササイズ(嫌な言葉とうれしい言葉)

過程	主な活動
導入 5分	・今日のエクササイズの目的「普段使っている言葉を振り返り、嫌な言葉とうれしい言葉を言い合って感じたことを話し合う」を知る。
展開 25分	・提示された事前調査「嫌な言葉」「うれしい言葉」の結果が書いてある紙を見る。 ・教師に向かって、提示された「嫌な言葉」と「うれしい言葉」を言い、言っているときの気持ちを発表したり、言われた教師の気持ちを知ったりする。 ・隣の席同士でペアになり、提示された「嫌な言葉」を30秒間言う。交代して言い終えたら、そのときの気持ちを話し合う。 ・同じペアで「うれしい言葉」についても同様に行う。
まとめ 15分	・活動を振り返り、今日のエクササイズで感じたことを全体で話し合う。 ・「嫌な言葉」を言われたらすごく嫌な気持ちになることやどんな言葉が嫌かは人によって違うことが分かる。 ・提示された事前調査「嫌な言葉」の紙をみんなで破り捨てる。

【資料11】授業後の感想

<p style="text-align: center;">< 子供の感想 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・嫌な言葉を隣の人に言った時、わたしは自分が嫌になった。うれしい言葉を言った時は自分もよい気持ちになった。 ・うれしい言葉を使うと、みんなとだんだん仲良くなれそうだった。 ・D男さんにうれしい言葉を言ったら、D男さんが笑顔になって、わたしも笑顔になった。 <p style="text-align: center;">< 学級担任の感想 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・隣同士で嫌な言葉を言う体験をした時、「あまり言いたくない。」という声が上がった。子供たちが嫌な言葉に抵抗を感じる心をもっているということを知ることができたし、安心した。

イ 帰りの会でのショートエクササイズ「四面鏡」(第13回11/16実施)

ショートエクササイズは、S G Eを取り入れた学級活動の授業(3回)の内容を補うことを目的として毎週1回実施した。

第13回は、第3回のS G Eの授業でねらいとした他者理解・自己理解(資料9)を更に深めることを目的として、事前の計画を変更し、「四面鏡」を実施

した(資料12)。文化祭をテーマとすることで子供たちはその時の具体的な友達の頑張りやよさを見つけ合い、どの子供も自分のよさを認められたうれしさを味わうことができた。

第12回の「1週間の生活振り返りシート」に友達から悪口を言われてつらい思いをしたことを記入していたC子は、自分のよさを友達に認めてもらったうれしさを感想に書いていた。(資料13)。

(4) 事後調査(11月)による実践の評価・考察

ア Q-Uの結果・考察

学校生活意欲尺度の学級平均得点を観点別に見ると、「友達関係」「学級の雰囲気

【資料12】帰りの会でのエクササイズ(四面鏡)

過程	主な活動
導入 5分	・今日のエクササイズの目的「周りのみんなから見た文化祭の準備から当日までの自分のいいところについて教えてもらう」を知る。 ・文化祭のときに同じ係同士(4~5人)でグループをつくり、一人1枚ずつワークシートをもらう。
展開 10分	・グループの一人の友達と自分のワークシートを交換し、文化祭準備・当日の相手のいいところだと思う言葉(27項目:例 頼りになった・アイデアをもっていた等)を選び、を付ける。同様にグループ全員と互いのシートを交換し、いいところを付け合う。 ・を付けた理由を相手に伝えたり、自分のいいところについてどうしてその項目にを付けたのが友達に質問したりする。
まとめ 5分	・活動を振り返り、自分が思ったことを発表し合い、うれしさを味わう。 ・授業の感想をワークシートに書く。

【資料13】C子の感想(四面鏡)

<ul style="list-style-type: none"> ・友達がいろいろなわたしのいいところを見つけて を付けてくれてうれしかった。今日はとても楽しかった。わたしは文化祭の劇でせりふを頑張って言った。
--

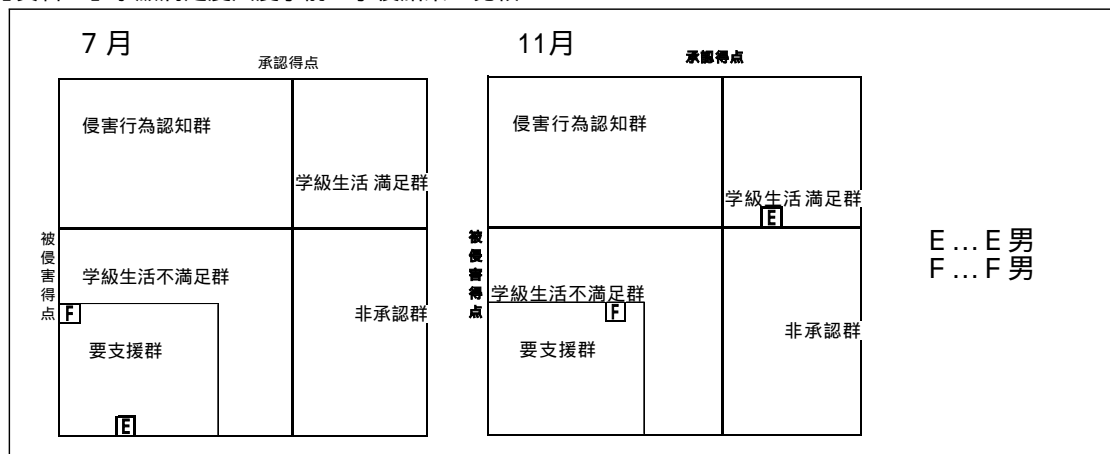
【資料14】学校生活意欲尺度事前・事後結果の比較

	友達関係	学習意欲	学級の雰囲気
7月平均	10.2点	10.8点	10.3点
11月平均	10.5点	10.8点	10.8点

気」が7月の得点を上回り、「学習意欲」は同得点だった（資料14）。学級への所属感が増し、学校生活を送る上での意欲が高まった子供が多いと考えられる。

学級満足度尺度は、資料15の分布図に示すように7月と比べると侵害行為認知群や学級生活不満足群から学級生活満足群への移動が見られる。学級生活満足群は29%から58%に増え、全国平均37%を上回っている。非承認群は0%から3%に増加した。侵害行為認知群は48%から23%に、学級生活不満足群は23%から16%に減少した。以上のことから、学級の半数以上の子供が3年A組に自分の居場所をもって生活を意欲的に送っていると推測される。しかし、非承認群や学級生活不満足群に属している子供などには、学級での存在感を高めるために、今後は活躍の場を与えてそのよさを認めるなど個別の支援が必要と考えられる。

【資料15】学級満足度尺度事前・事後結果の比較



イ 学級担任や教科担任教諭、養護教諭から見た学級の変容

事前調査と同様に、学級担任や教科担任教諭（一人）、養護教諭からそれぞれ学級の現在（11月下旬）の様子について聞き取り調査を行った。資料16に示すとおり、事前調査時と比べると、子供たちの間で互いを認める意識が育ってきているという学級の様子の変化がうかがえる。

【資料16】教師がとらえている学級の変容

学級の様子	教師
<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達のよいところを見つけ、認めることができてきた。 ・ エクササイズのリール(聞く・話す)が他教科でも生かされ、定着してきた。 ・ 前向きに、何事にもやる気をもって取り組む。 ・ 以前は、自己主張の強い子供が学級での活動を引っ張っていくところがあったが、今は一人一人が自分の存在感をもっているように感じる。 ・ 友達と意見が違ふとトラブルを起こしてしまいがちだった子供たちが、自分の気持ちを相手に伝え、話し合いで解決することを意識するようになりつつある。 ・ 学級に一体感が出てきた。 ・ 欠席が大変少なくなり、保健室に来る子供が減った。心が安定している。 	学 学 教 学 学・養 学 養

注)学...学級担任, 教...教科担任教諭, 養...養護教諭

ウ 「目指す学級の姿」と具体的な表れについての自己評価

7月に設定した「目指す学級の姿」につながる19項目の子供の具体的な表れがどの程度達成されたか、S G Eの実践が終了した11月に子供と学級担任にアンケート調査

(4段階評価)を行った。7月に学級担任が子供たちに特に育てたいと考えた項目については、資料17のとおりである。

子供の自己評価では 以外の項目については80%以上の子供が3及び4と評価した。なお、特に評価の高かった項目は、S G Eのねらいの中に取り入れたソーシャルスキルとも共通するもので、エクササイズを行う上でのルールとしてだけでなく、学級生活のルールとして意識が高まったと思われる。一方、学級担任は、 の評価を4とした以外、 の評価は3で子供の自己評価との相違が見られる。学級担任は、それぞれ項目の内容が子供に身に付いてきているが、今後も引き続き声掛けなど支援が必要であると感じている。

なお、 は19項目の中で最も子供の評価が低く、学級担任の評価も3である。自分の意見を押し通して感情的になることは減ってきているが、話し合いで解決する意識はまだ薄いと思われ、今後も指導の重点項目とする必要がある。

なお、子供の自己評価では全19項目中16項目で80%以上の子供が3・4と評価していた。学級担任は19項目中7項目を4、12項目を3と評価し、2や1と評価した項目はなかった。これらのことから一人一人が安心感をもつことができるために目指す学級の姿「どの子にもよさがあり、それを認め合うことができる学級」に近付き、社会性を身に付けることにつながったものと推測される。

エ 個人に焦点を当てた考察

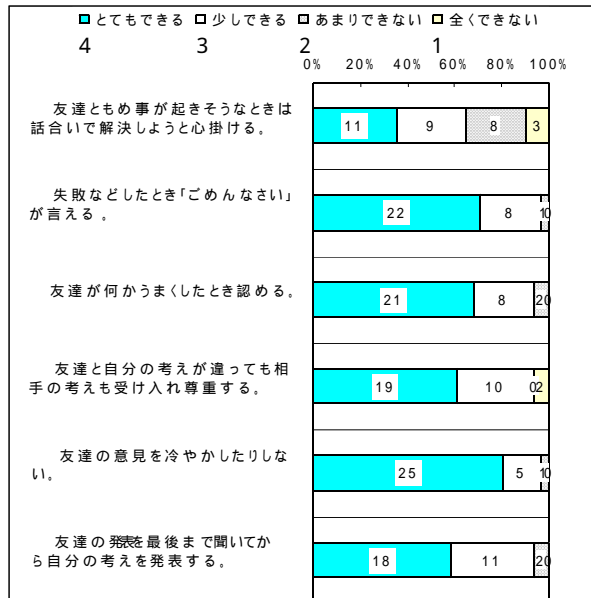
(ア) E男の学級に対する意識の変容

E男は、友達とかかわることが苦手で

登校を渋りがちであった。事前調査では、学級生活不満足群の中でも要支援群に属していたが、11月には資料15に示すように学級生活満足群に変わった。学校生活意欲尺度の得点を観点別(友達関係・学習意欲・学級の雰囲気)に見ると「学級の雰囲気」の得点が特に伸びている(資料18)。「1週間の生活振り返りシート」の学級の居心地についての自己評価は、「0(居心地は全然よくない)」から、「6(ふつうより少し居心地がよい)」へ上昇している(資料19)。

E男は2学期から遅刻・欠席が減り、一人で教室に入ることができるようになった。また、多くの友達に自分から声を掛けて遊ぶようになってきた。学級担任はE男について、「虫が好きなこと、足が速いことなど自分のよさを友達が認めてくれ

【資料17】子供の自己評価アンケート(抜粋)



注) グラフの数値は人数を表す。

【資料18】E男の学校生活意欲尺度結果比較

	友達関係	学習意欲	学級の雰囲気
7月	4点	3点	3点
11月	9点	9点	10点

たことで自分に自信がついたようだ。友達とのかかわりが増え、人との付き合い方を学んだと思う。」と感想を述べた。

S G E をきっかけに学級の多くの友達とかかわることに抵抗感がなくなってきたこと、また自分のよさを友達に認めてもらうことが自信につながり、E男は学級に安心感をもち、自分の居場所を見つけたのではないかと考えられる。

(1) F男の学級に対する意識の変容

F男は、事前調査では学級生活満足群の中でも要支援群に属する子供であった。そのときの気分によって活動への意欲が左右され、自分の思いが通らないと教室を出てしまうなどやや自己中心的な言動が見られ、学級の子供たちから反感をもたれることも多かった。

事後調査では資料15に示すように被侵害認知得点が6点下がり、侵害されているという意識が事前調査時より薄らいだと考えられる。「1週間ごとの生活振り返りシート」の学級の居心地についての評価は、9月から少しずつ上昇している(資料19)。学級担任はF男のよいところを認め、学級の子供たちにもF男のよさをできるだけ伝えるとともに、他児のF男を思いやる行動をF男本人に伝えた。学級担任は、「F男自身の心の成長もあるが、学級の子供たちにF男のよさを認め受容する態度が育ってきたことでF男が学級に自分の居場所を感じるようになったと思う。F男の変容は数値では大きい変化は見られないが、実際には大きな成長を感じる。」と感想を述べた。学級担任の支援とS G Eの積み重ねにより、自分と相手の考え方の違いや友達とかかわる楽しさを感じる機会が増え、友達が自分を支えてくれていることをF男が自覚するようになったと考えられる。

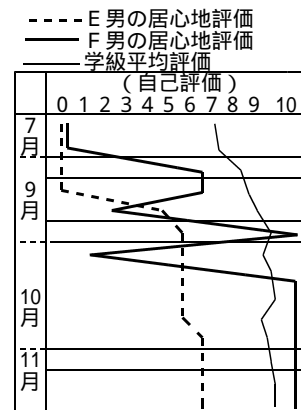
(5) 心の発達段階を考慮した支援

研究の方法でも述べたように、ここでは3年と同時期に同様の実践を行った5年についてふれることで心の発達に応じた支援の在り方を考察する。

小学校6年間の心の発達段階を見たとき、5年の時期は、資料1に示すように、性差を意識し同性の集団をつくる傾向があり、自己の評価が低下し、自己を否定的に見る子供も一部に現れる場合がある。5年A組は、事前調査の結果から、子供同士のトラブルが少ないが異性を意識し、一部の友達との結び付きが強い子供や、自分に自信がなく自主性に欠けると推測される子供がやや多いと考えられた。これは、心の発達過程の中で5年の子供の表れとしては自然なことでもあり、学級担任は、この認識の上に学校生活の中で子供一人一人に活躍の場があるように配慮しながら、一人一人のよさを認めることで子供に自信をもたせていくことを心掛けた。

S G E については、信頼体験・自己理解をねらいとし、第1回のS G Eを取り入れた

【資料19】学級の居心地自己評価



注)「1週間の生活振り返りシート」質問4による自己評価をまとめた。
注) [] はS G Eの授業を実施した週を示す。

学級活動の授業では、男女が楽しく活動できるためのゲーム性の高いエクササイズ、第2回では異性の相手について互いに質問し、相手のよさに気付くためのエクササイズ、第3回では自分の考えに自信をもって発言したり相手の考えを認めたりするエクササイズを行った。また、ショートエクササイズでは自己理解を中心に信頼関係や他者理解などをねらうものを実施した。特に「四面鏡」については、3年A組では文化祭をテーマにして他者理解をねらいの重点としたが、自分のことを見つめることができてくる5年A組では、「自分の性格」をテーマにして自己理解をねらいの重点とした。「頼りになる・公平な・優しい」など23項目を挙げ、生活班の子供同士で相手のよさに当てはまる項目に を付け合った。普段は直接相手や自分の内面のよさを話題にすることがない子供たちであるが、自分や友達のよさを知ることには関心が強く、どの項目に が付いたのか互いのシートを見せ合う姿が見られた。Q - Uの学級満足度尺度で非承認群に属していたD男は、友達が自分のいいところをたくさん見つけてくれたことに戸惑いながらもうれしい気持ちを感じて書いた(資料20)。

【資料20】D男の感想(四面鏡)

このように目の前の子供あるいは学級の今現在の姿だけを見るのではなく、小学校の6年間の発達段階を視野に入れ、成長過程の中で子供の心を理解しようとする教師の姿勢が必要である。そうすることで、学級担任の子供のとらえ方が広がり、人間関係づくりにより適切と思われる支援を考えていくことができる。

・自分では思っていなかった項目にたくさん が付いていた。意外だなと思うものにも が付いていた。Cさんは、「落ち着いている」の項目に じゃなくて、をつけてくれてぼくはびっくりした。

5 研究のまとめ

(1) 成果

ア 安心感をもつことができる学級づくりのために「目指す学級の姿」と具体的な子供の表れ(19項目)を設定し、S G Eの実践目的や教師の日ごろの支援の焦点化ができた。

イ 小学校6年間の心の発達過程の中で学級や個人の実態をとらえ、それに合わせてS G Eのねらいを変えたり、エクササイズの一部を変えたりするなど内容の工夫が必要であることが分かった。

また、エクササイズのねらいやルールを子供にはっきり伝えることで、子供の取り組む姿勢が意欲的になった。S G Eは、教師が学級の実態を見つめ、どのような子供を育てたいのかねらいをはっきりさせることで、初めてS G Eとしての機能を果たすことを実践を通して理解した。

ウ 実態調査やS G Eの実践が、学級担任自身が子供への接し方を客観的に振り返るきっかけとなった。本研究を通して二人の学級担任は、「子供の言葉や行動を待つ構えの大切さを改めて感じた。学級の実態や自分の支援の在り方について客観的に考える機会となりよい経験をした。」と感想を述べた。子供の気持ちを受容し、よさを認め励ますことを心掛けた学級担任の姿勢が子供の心の安定につながったと考えられる。

以上ア～ウが相乗効果となり、子供一人一人が安心感をもつことができる学級へと発展したと思われる。

(2) 今後に向けて

ア 学級全体をとらえる見方とその中の個々の子供をとらえる見方の両方の視点をもって、子供たちの人間関係をとらえていきたい。

イ 心の発達段階を考慮しながら子供の人間関係をとらえることが大切である。今後は発達段階には個人差があることを押さえながら、一つの見方だけでなく、多様な視点から発達段階をとらえることが必要である。

ウ 「1週間の生活振り返りシート」を継続することは、子供の実態をとらえることに有効であった。しかし毎週継続して行うことが子供にとっては負担に感じる時もあった。子供の実態に合わせ、質問内容、質問数、期間などの工夫をしていく必要がある。

エ ソーシャルスキルの要素を加味したS G Eを活用して学級の人間関係づくりの実践を行ったが、今後は学級や子供一人一人の実態をとらえながら、多様な方法で支援を考えていくことが必要である。

ア～エを押さえた取組が子供たちの人間関係を深めるために必要である。しかし、最も大切なことは教師の子供を受容する姿勢である。教師はそのことを意識しながら子供への支援を心掛けていきたい。

注

- 1) 構成的グループエンカウンターとは、リレーションづくりと自己発見をねらった集団体験学習のこと。エクササイズ、グループサイズ、時間の枠で構成するところが特徴。
國分康孝編集『育てるカウンセリングが学級を変える 小学校編』, 図書文化, 1998年, 194ページ.
- 2) 自分を取り巻く周囲の人との関係の中で、他者の気持ちや考え方を知り、他者に対する適切なかわり方を知り、それを通して自分自身をも知ることが社会性の獲得という。
近藤邦夫・西林克彦・村瀬喜代子・三浦香苗編『児童期の課題と支援』, 新曜社, 2000年, 13ページ.
- 3) 「たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U」(図書文化社)は、二つの質問紙と自由記述のアンケートから構成されている。質問紙の一つは「いごちのよいクラスにするためのアンケート:学級満足度尺度」、もう一つは「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート:学校生活意欲尺度」である。学級満足度尺度は子供が学級にどのくらい満足しているかを測る尺度。学校生活意欲尺度は「友人との関係」「学級との関係」「学習意欲」など、子供が学校生活の中のどの場面について、特に意欲を持っているかを把握する尺度である。
河村茂雄編著『グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム小学校編』, 図書文化, 2001年, 88ページ.
- 4) 人間関係に関する知識と具体的な技術やコツを総称してソーシャルスキルと呼んでいる。
國分康孝監修, 小林正幸・相川充編著『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』, 図書文化, 1999年, 12ページ.